



## 年間第 18 主日 (ヨハネ 6:24-35)

神がお遣わしになった者をぶれずに信じる

年間第 18 主日 B 年はイエスと群衆の対話が繰り返される場面が描かれています。この対話は実りのない不毛な対話に終わってしまいます。問いかける群衆にイエスは的確な答えを示すのに、群衆がイエスの示す答えを受け入れようとしないからです。イエスの示す答えに群衆は近づこうとしないので、むしろイエスと群衆の溝は深まっています。

先週水曜日から金曜日まで、神言修道会の神学生を預かっていました。中学 3 年生です。本来は曾根教会に所属しているのですが、親が神奈川に引っ越したので夏の数日間この神学生はおばあちゃんを曾根に訪ねて、そのあとわたしが 2 泊 3 日で預かりました。

神学生の母親からは、長崎にあるルドヴィコ神学院が置かれている厳しい現状を聞かされてきました。具体的には、ルドヴィコ神学院に在籍している神学生は夏休みの時点で 2 人しかおらず、わたしが預かろうとしている神学生も心は揺れている、続けていく気持ちが折れかけているということでした。

わたしは話を聞いていて、誰だって心が折れるだろうなあと思ったのです。少ないと言っても、10 人くらいはいなければ、神学生同士で励まし合うのも限度があると思ったのです。神学生の母親からは、本人を何とか励ましてもらえたらということでした。

わたしが神学生を預かった日は、水曜日から木曜日にかけてで、子供たちのミサの期間でした。わたしは何かヒントをあげて、考えるきっかけになればと思い、子供のミサのときにこう話したのです。

「ドッジボールの試合にもう一度参加できるようになりましたね。ドッジボールは内野にいる人が相手からボールを当てられたら外野に出なければなりません。内野に残っている人数が多いほうが試合に勝ちますが、内野の人数が減っていくと生き残るのも大変です。もし内野に残っているのが 3 人になったら、諦めますか？」

「諦めません」「2 人になったら諦めますか？」「諦めません」「さすがに 1 人になったら諦めてすぐに当てられて終わりますか？」「最後まで頑張ります」「だよなあ」

もちろん話しかけているのは目の前の小学生にですが、気持ちとしては中学 3 年生の神学生に届けと、そんな思いで訴えかけました。水曜日の浜串ミサと木曜日の福見ミサ、2 度にわたって子供たちに話しかけながら、神学生にわたしの思いを伝えました。

現実的には、1 人になっても頑張れというのは酷かもしれません。けれども、わたしは 1 人になっても生き残ろうとする姿は、周囲の人に何かを感じさせ、行き詰まりを打ち破る突破口が与えられるのではないかと考えています。わたし個人としては、長崎教区の神学院で共同生活をさせてもらいながら、神言会の神学生として続けるのも 1 つの方法かなと思います。実際問題はそう簡単ではないかもしれません。

さて説教の冒頭イエスと群衆の対話がかみ合わないと言いましたが、例を一つ挙げると、群衆が「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」（6・28）と問いかけ、イエスは「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である」（6・29）と答えを示しますが、群衆はイエスの答えに近づこうとしないのです。

「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。」（6・30）さきほどの神学生の話に戻ると、ルドヴィコ神学院の生徒がどんどん去っていく中で、残っている神学生は誰を信じればよいのか、誰についていけばよいのか不安になっていると思うのです。校長を務める神父さまにさえも、「あなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか」と言いたくなるかもしれません。

もしかしたら、2人しかいない神学生に都合よいような答えは示されないかもしれません。しかし、迷いを捨て、「神がお遣わしになった者を信じる」つまり現在のルドヴィコ神学院の校長神父さまの勧めを信じて、精一杯努力するならば、きっと道は開けると信じています。

神学生が2人しかいなくなると、2人で険しい道を歩くのは至難の業かもしれません。もしかしたら2人のうちの1人が召命の道を去ってしまい、1人きりになるかもしれません。想像を絶する険しい道ですが、困難なのは人数の問題よりも、神に身を委ね、独りよがりな結論を取り下げることだと思うのです。こんな場所にいられようかという思いを取り下げることが、どんなに困難なことでしょう。ぜひその試練を乗り越えてくれるように、わたしは毎日祈りたいと思います。

考えるとわたしたちも、イエスを信じない人から根本的な問いを突き付けられたときに、答えを準備しておかなければなりません。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。この問いの答えは、次の通りです。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」

まだイエス・キリストを信じていない人に、「あー、あなたがイエス・キリストを信じていることが、よく分かりました」という生き方を示して、わたしたちは神の業を行うのです。

誰かと一緒にご飯を食べるときに「いただきます」だけでは、イエス・キリストを信じていることは伝わらないのです。家族ぐるみで親しくしている家族が一晩わが家に泊まった時に「おやすみなさい」のあいさつだけで寝るならば、イエス・キリストを信じていることは伝わらないのです。親しい家族が土曜日にわが家に泊まりに来た場合、翌朝「おはよう」のあいさつだけでは、イエス・キリストを信じていることは伝わらないのです。

ぜひ、わたしたちは周りの人々に対して、「わたしたちは、神がお遣わしになった者を信じています」という証を立てましょう。わたしたちがこうして神の業を行う時、「決して飢えることがなく、決して渴くことがない」体験を自分にも他人にも味わわせることになるのです。